山形大学歴史・地理・人類学論集，創刊号，41 − 50，2000 年

山形市三島通りと借景　— 山形の景観の考古学 —
City Planning and Landmark in Yamagata city during Meiji Era

阿　子　島　　功
AKOJIMA Isao

キーワード：都市計画，ランドマーク，古地図，明治時代，山形
Keywords：City planning, L and mark , Historical map, Yamagata, Meiji Era

1．問題点の所在
2．山形市の明治時代の都市計画道路三島通りの成立まで
3．三島通りの借景の変化
むすび

1．　問題点の所在

山形市街は近世城下町地割りに明治前期の近代都市計画が加えられて発達してきたといわれるが，その詳細は必ずしも説明されているとはいえない。たとえば，旧県庁前の東西の通りと三島通りは明治前期の一連の都市計画道路であるが１直線につながらないのはなぜか。開発される直前の原風景はどのようなものであったか。

山形市市街の原形は，扇状地の扇端部におかれた霞城と，その東側をとりまいて扇央部に発達した近世城下町であり，いまだにその基本形をとどめている。近代的都市計画は明治時代前期に時の県知事三島通庸によって計画され，城下町の北東縁に県庁を中心とする新規の町割が付け加えられた。三島通りはその一辺をなす。通りの名称も三島通庸にちなむものであり，三島神社がある。

写真１　明治 14(1881)年山形県新築図錦絵　（山形大学附属博物館蔵）県庁ほかを注記

県庁を中心とした近代都市計画町割は，城下町の町屋の北東側のおそらく河原跡に新しく付け加えられた。すなわち，かつての町屋の中心街の十日町→七日町の南北の筋は西へ折れ曲がって旅籠町の通りへと通じていた。明治の新しい中心街である県庁をはじめとする官庁・学校街が，七日町の北の延長に据えられた。そこは一部に町会所があった以外は空き地であった。

その拡張のパターンは，米沢市の昭和後期に実現した都市計画においても全く同じである。ここでは松川の氾濫原である城下町の北西外側の金池地区に全く新しく官庁と商業地が付加された。

山形県庁は明治44年5月大火で焼失し，大正4年に再建された（明治45年6月予算案策定，大正2年起工，同5年6月竣工落成）。

昭和50年に県庁が扇頂部に移転し，東南村山合同庁舎として使用された後，同59年3月に国重要文化財に指定され，復旧工事がくわえられて，平成7年10月より“文翔館”とよばれる博物館施設（正式名 山形県郷土館）となった。以下，旧県庁と記す。

旧県庁の前縁の東西の通りは，その正面通りである南北の筋（県庁）に直交するように計画されているが，これと三島通りとは1直線にはつながらない。現在の県生涯学習センター・図書館施設である“遊学館”（前 県知事公舎）付近で少し折れ曲がっている。

図1 江戸時代前期，最上時代の城下町の北西部と馬見ケ崎川の河道。 最上家在城諸家中町割図 （元和時代，県立図書館蔵）山形市史，別巻2，写真1に注記。

西

東

←→

三島通り

写真2 三島神社と旧千歳園方面 北のつきあたりの現山形県立東高の手前に旧河道の起伏がみえる。

写真３　三島通り　　“遊学館”前より，“教育資料館（旧師範学校）”とその背景を望む 99.12

写真４　馬見ケ崎川堤防の桜，山形大橋と盃山の麓のＲ113 沿いの法面。
山形市大規模建築物等届出制度のあらまし（平成 11 年）の説明パンフレットの表紙より。

写真５　盃山の麓の R113 沿いの法面　　山形市市役所屋上展望室より 99.8

現在の遊学館付近から三島通りをながめるとその先に旧師範学校の正門と尖塔をもつ２階建ての建物（国重要文化財指定。現在は県立博物館分館で“教育資料館”）が正面にみえる。さらにその背後に馬見ケ崎川の対岸の，盃山（・278m）に連なる三角形の尾根（“馬見ケ崎”と考えられるあたり）がみえる。師範学校校舎は背後の三角山を**借景**にしているようにみえる。すなわち三島通りが**山あて**をして計画された可能性がある。

しかし，それを裏づける記述はみつかっていないから，それ以外の可能性についても検討しなければならない。三島通りが完成するまでの経過を検討する。実は当時の都市計画と扇状地の微地形の制約について検討すべき点がある。

つぎに現在の風景をみると，師範学校の背後の山肌にコンクリートの法面がみえる（写真３）。もし借景であったのであるならば，近年の道路建設工事は景観配慮を欠いたことになる。

図２　明治 10(1877)年の山形市街全図

未発刊の版木から山形郷土研究会が S. 32 に印刷。山形市郷土館に展示。黒描が県庁予定位置。

時代とともに，工法と投入できる経費が変わり，地形制約との関わりが変化してきたことを述べたい。

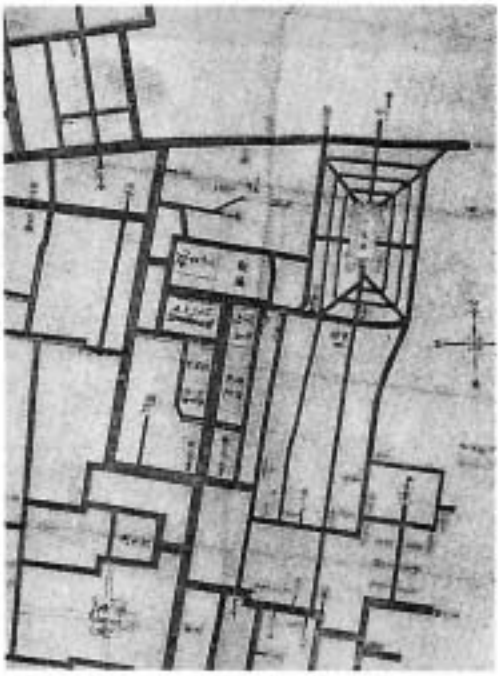

図３　明治 14(1881)年 山形市街図

山形市史別巻２、写真 21 より。部分。

２．山形市の明治時代の都市計画道路 ――― 三島通りの成立まで

城下町の北西縁の万日河原とよばれる地区に県庁を中心とした新規の都市計画が付加されたのであるが，都市計画前の原風景がわからない。馬見ケ崎川が城下町をさけて江戸時代前期に切り替えられた跡の旧河道の地割りは昭和・平成時代になってもその名残が認められるが，明治初期の風景すなわち河道跡地となって約 200 年経過後の土地利用は必ずしもわからない。

三島が計画した県庁敷地は庁舎敷地にかかわる上申書（明治９年）に「土地高燥ニシテ眺望ニ適シ其位置山形市内ノ中央ニ当リ，四方交通ノ要衝ニテ実ニ至極ノ場所ニ之レ有リ候」（丸山，1979, p. 81）と認識されたようである。しか

し，古いとはいえ旧河道であり明治23年9月洪水のとき，三島通りから県庁前の通り道路は掘り起こされて，水深は大人の胸に及び…，大正2年8月洪水のときには，県師範学校裏の堤防が決壊し，…県庁前通りの水深は8尺に達した（後藤，1980，p. 929-934）。

明治時代の山形市街の方位関係，面積関係を正確に表す地図は，明治34(1901)年測量，明治37年製版印刷発行の大日本帝国陸地測量部の1:20,000正式測量地形図である。それ以前の地図では測量精度が低い，もしくは概念図である。一連の都市図はすべて山形市史に収録されている（工藤・横山，1976，別巻2，p. 1-28，図版頁1-47）。これらに基づいて三島通りの成立までを検討する。地図1～8は，比較のためおおよそ同一方位となるようならべた。

1. 明治10年の山形市街全図　（図2）

県庁予定地が黒描され，正面の町筋が描かれているが，県庁敷地の東側はうねった南北道がある（M34地形図にもある）だけでなにも描かれていない。新計画のため未刊行の版木である。

2. 明治14年山形市街全図　（図3）

県庁東側に近代的公園“千歳園”が表されている。8方向の放射状の園路とそれをうずまき状につなぐ園路が描かれている。しかし，それ以降の地図にこの園路が描かれることはなかった。

千歳園の南縁道路が三島通りで，千歳園の南東隅で終わっている。県庁前の東西通りと三島通りは(概念図として)一直線に描かれている。三島通りに沿って水力織場と三島神社の書き込みがみえる。

3. 明治14年山形県新築図錦絵（山形大学附属博物館蔵）　（写真1）

新開地を南西からみた鳥観図であり，千歳園のすこし東側まで描かれているが，千歳園の東側は緑地のようにみえる。明治34年測地形図ではほとんどが桑畑である。師範学校はこのときは県庁前の通りの東側にあった。現在位置に移ったのは明治34年である。

千歳園の南半から県庁の北側にかけてと，長源寺（城下町東北を限る寺。図1では光禅寺）の北側にかけて“霞”が描かれているが，いずれも馬見ケ崎川旧河道であり，空き地を隠した表現ではなかったろうか。

4. 明治22年山形市街図　（図4）

原図縮尺は1:32,000の概念図である。家屋にうめられた街区，空き地？，農地との区別がなされている。千歳園中央の築山が矩形園地の中央にないが，この部分は概念で描かれたのであろう。県庁前から三島通りは1直線に表現されている。

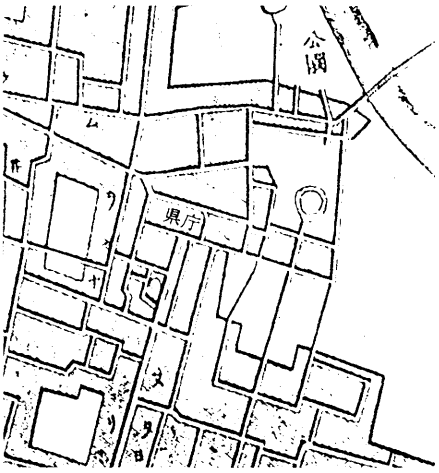

図4　明治22(1889)年の市街図

山形市史別巻2、写真22より部分。

5. 明治23年洪水浸水範囲を示す山形新聞記事の付図

手書きの概念図であるが，3筋の旧河道に沿った浸水範囲が明示されていて三島通りと2筋

の旧河道が斜交していることがよくわかる。旧河道は千歳園の築山の筋、後の師範学校～旧県庁裏の筋、八ケ郷堰の筋の３筋である。

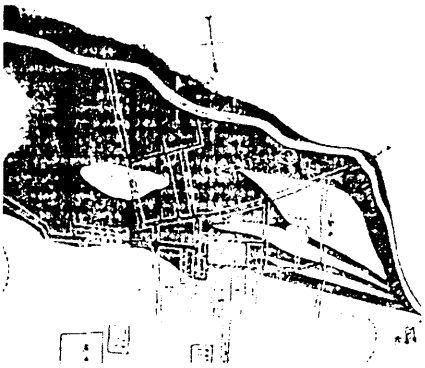

図５　明治23(1890)年の洪水浸水範囲を示す山形新聞の記事の付図市史別巻2, 写真61. 山大の山形新聞マイクロフイルムでは欠

図６　明治27年市南大火の図の北部分

山形市史別巻2、写真41。黒描部分が焼失地区。

6. 明治27年市南大火の図　（図６）

千歳園付近の描写，県庁庁舎の平面形などが詳しい。千歳園のなかにうねった道と水路が描かれているが，M10年図に描かれている旧来の道であろう。

この地図では，県庁南縁道路と三島通りとが一直線にならないことが表現されている。三島神社の書き込み位置が現在とは異なって（おそらく誤って）記されているが，そのあたりで南北道は鍵の手状（図２と同じ）になっていることが表現されている。

7.　明治34(1901)年測1:20,000地形図「山形」　（図７）

千歳園中央（築山）に山形中学校，南東外側に山形師範学校が描かれている。千歳園の区画より東へ１街区（点描家屋と宅地の表現）をへだてて師範学校敷地がもうけられている。旅籠町から通称“馬畔”の当地に移転したのは明治34年９月である。このときまでに千歳園の東側へ街区が付け加わっていたのであろう。

県庁南縁東西通りと三島通りの斜交関係が表現されている。なお，明治40年頃の写真（盃山側の三角峰からみた写真，市史，別巻 2，図版頁32の写真37）によれば師範学校前の通りは，千歳園南辺の三島通りの正しい延長である。

以上のように，三島通りが師範学校正面通りとして完成したのは明治30年代であり，三島通りがはじめに引かれたのは明治10年代である。

千歳園の南辺道路としてのその方角は，おおよそは盃山，詳しくみれば盃山の手前の高度250mの三角峯，あるいは当時は見通すことができた馬見ケ崎川河原への山麓の凸出部分（右岸堤のはじまり地点）を指している。いずれにせよ，明治30年代に三島通りの正面に師範学校がつくられたとき，三角峯が借景とされる結果となった。

それでは，明治10年代の都市計画のはじめの段階で千歳園南辺道路の山あてが意識されたであろうか。当時は盃山，その手前の高度 250mの三角峯だけでなく馬見ケ崎川河原への山麓の

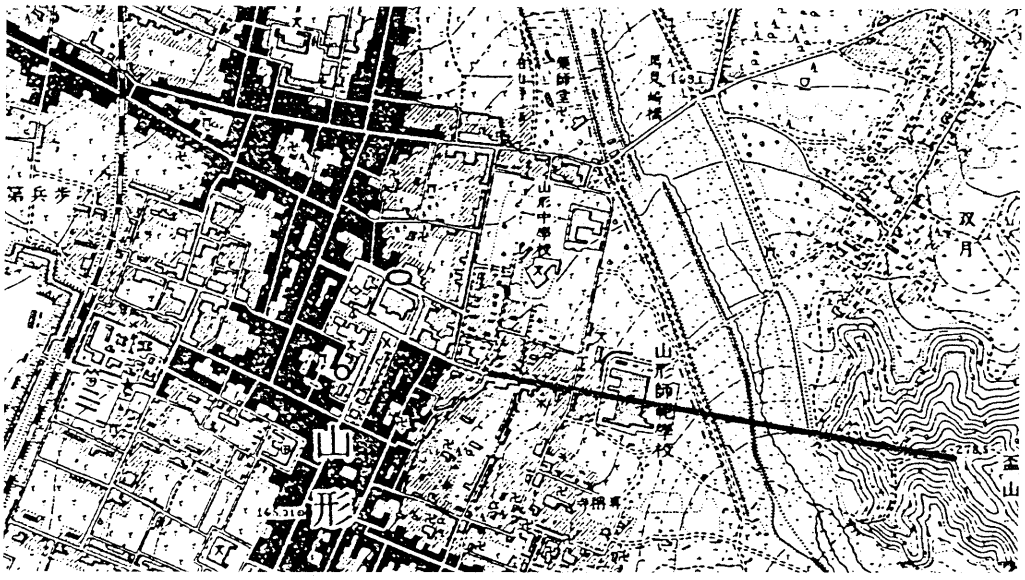

図７　M34（1901）年測 1:20,000 地形図　　黒太線が三島通りとその延長。ほぼ原寸。

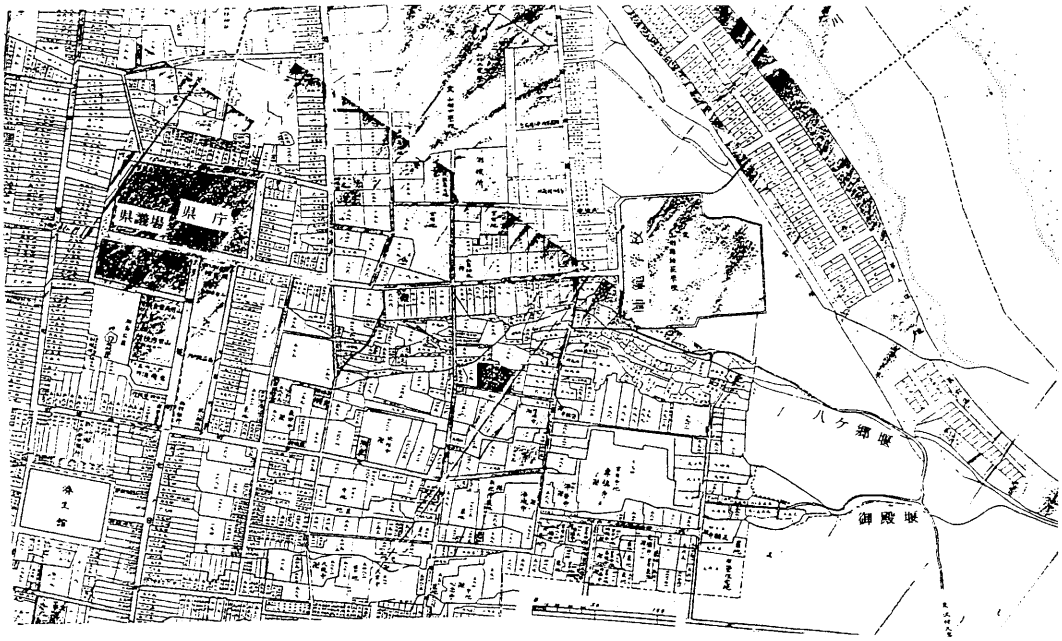

図８　昭和２（1927）年山形市街図　原図縮尺 1:3,000 より縮小。 部分。不整形地割りが旧河道。

凸出部もみえたはずである。これらのいずれかが馬見ケ崎である。[1)]

県庁南辺の東西道路は県庁前通りに直交する方角であり，城下町町割をひきついでいる。なぜ三島通りをその正しい延長としなかったのであろうか。

県庁南辺の東西道路を東へ延長すると，それはむしろ現在の新築西通り緑町線になる（昭和48年3月末より県道)。この部分は明治34年測図の等高線と土地利用，昭和 4 年市街全図にある八ケ郷堰に沿った不整形地割りから読むことができる旧河道の部分でもある(阿子島，1972)。したがって，三島通りは旧河道の微起伏と堰をさけるために，まっすぐに延ばさなかった可能性もある。文書記述の発見が待たれる。

3．三島通りの借景の変化

1．現況　国指定重文である旧師範学校建屋を正面から眺めるとき，借景の山の緑の右手下側，学校建屋の右肩にコンクリートの壁面がみえる。とくに目だつのは季節的に緑の濃くなる時期である。この法面は国道113号バイパスが馬見ケ崎川をわたる山形大橋の下流側右岸にある（写真5)。 写真4は山形市大規模建築物等届出制度の紹介パンフレットの表紙に用いられた写真であり，“美しい山形”[2)] のシンボルのひとつである馬見ケ崎川堤防の桜の背景にコンクリート法面が写ることとなった。

山形大橋（昭和43年12月竣工，長さ253.8m）は馬見ケ崎川を斜めに渡っているが，それは橋梁を含めた道路線形をなめらかにすることをねらったものである（阿子島，1993)。従来は橋梁は河道に直角に架けるのがあたりまえとされたが，技術と社会的投資がそれを可能にしたのである。しかし，馬見ケ崎の麓を削って，急傾斜の法面をつくってしまった。これを避ける工法としては，馬見ケ崎川を直角に渡ったのち，そのままトンネルで盃山ををぬけることであるが，それはゆるされない事情があったのであろう。ごく急傾斜の壁面を緑化し修復する技術は，潅木・樹木の質感にはおよばないものの，蔦や苔を用いた方法はすでにある。

2．大正時代～昭和初期の盃山の景観

さて，師範学校正面校舎の借景となった盃山はその当時，緑したたる山肌であったのであろうか。実は大正時代～昭和初期の写真によれば，木が刈り払われていたようにみえる。

大正5年県庁落成の後，仮県庁とされていた山形県物産陳列所（現在の三浦記念館～山形銀行本店）の写真の背景に盃山がみえる（写真6）が，盃山の南斜面は植被が薄い（市史別巻2，図版頁113，写真225；落葉積雪季の写真としても植被が薄い)。昭和3年竣功直前の二口橋の背景（同写真 74），昭和初期の宮町方面からみた馬見ケ崎川橋の背景（同写真72）でも同様に読める。

都市の裏山の薪炭林，すなわち里山として利用されて，しばしば伐採されたのも事実のようである。

写真6　大正年間の山形県物産陳列所北翼の背景の盃山　市史別巻2，写真225の一部

3．近年の土木建設工事と景観配慮　最後に山形のごく近年の景観配慮の施策について述べる。建設省東北地方建設局では平成８年より“美しい国土づくりアドバイザー”制度を発足させ，大規模土木工事の環境と景観デザインへの配慮の事例研究を，環境アセスメントとは別に検討している。山形県では平成７年６月に山形県土景観形成ガイドが策定され，県が行う主な土木建設工事や付帯設備のデザインについては平成７年 10 月から県土景観形成検討委員会を中心として県の土木部技術職員多数が相互に検討する機会がもたれている。平成 12 年 3 月までに 10 回，約 30 件が審議された。

山形市では平成８年に山形市景観条例が施行された。この条例には，特定地区の景観形成，町並み協定やすぐれた景観形成例の表彰などのほか，平成 10 年に大規模建築物等の定義が確定した[3]ので，特定地区以外でも平成 11 年 6 月以降の建築確認申請にあたっては，高さ 15m 以上あるいは投影面積 1,000m² 以上などの条件をみたすすべての建築物は，“デザインガイド”に沿って確認が行われる。適合しないと判断されたときには市長が助言・指導できる（景観条例第 17 条)。この条件によって年間約 50 件が該当すると予想されているから 10 年後に市内 500 の建造物がデザインガイドに沿って更新される。平成 12 年の市環境審議会には１年間程度の実施状況の報告がなされてその効果が検討されることになっている。

国・県・市によるこれらの施策の背景には，従来の機能・防災一辺倒であった建設土木工事計画に対して，環境保全や景観形成の観点がみなおされたことがある。また社会投資の余裕？がようやくできた（あるいは将来への負債となることも容認される)ことになったためである。平成７(1995)年の建設省環境対策大綱あたりから建設土木工事が劇的に変化し，全国各地で河川，道路，町並みが急激に変わってきたように感じられる。全国各地でさまざまの工夫・個性化が意識されているようではあるが，結果としては画一化・没個性も感じられる例も少なくない。しかし，それが地方をこえた，風土をこえられない日本共通の特徴であるならそれでよいであろう。時間の経過によって選択されればよいのである。しかし当初からなじまないと予想されるものはやはり避けられるべきであろう。

県と市の両ガイドともに，新規の建造物には周辺景観との調和，歴史性との調和がうたわれている。平成 11 年末に旧県庁庁舎“文翔館”の背後に高層マンション建設が計画されたことをめぐって，歴史的建造物の借景論議が沸き立った（山形県の都市景観を考えるシンポジウム――歴史的景観と都心居住のありかたを考える――, 1999. 12. 7, 於 文翔館)。

4．歴史地名について　また眼にみえない景観保全の問題として地名の問題がある。山形市内の“あかねケ丘”という町名（昭和 51 年１月～）は，本来扇状地外側の低湿地で平坦地であるから丘と呼ぶことは不適切である。山形市内の“馬見ケ崎”という町名（平成９年３月～）は，馬見ケ崎川ぞいから転化したものであろうが，本来の馬見ケ崎は藩主が騎で登って国見をしたという説[1]が広くうけいれられている現在，盃山周辺のほうが“崎”としてふさわしいのである[4]。馬見ケ崎川の旧来の名称は，下流が白川，上流が小白川であろう。

むすび

山形市の明治～平成時代の都市計画において景観配慮とくに借景の配慮がなされたのかどう

かを検討した。道路計画において地形条件と技術，ゆるされる投資量との関係が時代とともに変化し，景観への配慮もまた変化してきた。

注

1）18C 後半の秋元氏時代の山形城下図にある記述。図は山形市七日町荒井徳助氏蔵。昭和 12 年の蒔絵師武田安治氏による写しであり，山形市霞城公園内　山形市郷土館＝旧済生館病院本館を移築＝蔵。　鳥居左京亮様山形御普請之時愛岩登馬ヲ放シ地利ヲ見給フ夫ヨリ馬見ケ崎傳

2）美しい山形をつくる条例（昭和 63 年）

3）上記のもとに，山形市環境計画（平成 5 年），山形市都市景観ガイドプラン（平成 6 年），山形市景観条例（平成 8 年）が制定されている。大規模建築物等景観誘導基準は山形市景観条例の下位規定である。

4）マミの由来，サキの問題（低地にある見崎，中山町長崎）について検討の要がある。

文　献

阿子島　功（1992）昭和 2 年山形市街図によむ馬見ケ崎川旧河道 —— 微地形判読と古地図（2）。山形応用地質，No. 12，p. 94-96

阿子島　功（1993）地形と道。『山形の道』，山形県生涯学習人材育成機構，p. 185-212

後藤嘉一（1980）馬見ケ崎川水害史。山形市史，下巻，近代編，山形市史編纂委員会，p. 929-934

工藤定雄・横山昭男（1976）市街の変遷。山形市史，別巻 2，生活文化編，山形市史編纂委員会、p. 1-28、図版頁 1-47

丸山光太郎（1979）土木県令・三島通庸　栃木県出版文化協会，309ps

Summary: **City Planning and Landmark in Yamagata city during Meiji Era**

AKOJIMA　Isao

The modern city plan of Yamagata during the early stage of Meiji Era was introduced by the first prefectural governor Toshimichi MISHIMA in 1880's. The former plan of city during the Edo Era was formed on the center of the fan of the Mamigasaki river and the river course was made to turn to the north about 350 years ago. A new plan was added to the northeastern corner of the old downtown, where was the abandoned river course of the Mamigasaki .

The axes of new city plan succeeded the axes of the former downtown, but a part of new street, the Mishima Street was slightly bent. The author examined the reason why the street was partly deformed and got two ideas. One is to aim at the hill of landmark and the one is to avoid the water ditch course along the one of former river channels. Later the landmark hill might be used as the back ground scenery of the center house of Teacher's college at the end of the street. The recent public engineering cut the hill side and damaged the scenery at the back of the college house. A new concept that the engineering work is to be gentle for landscape is becoming to be accepted as the public interest.